

序

心電図。それは医療で使用されている機器のなかでも歴史が深く、また頻繁に使用されるものだろう。技術が進歩し、先端技術を取り込んださまざまな医療機器が開発されるなか、古くからあるのにいまだに心電図の存在意義は高い。したがって、心電図に関する書物は国内外問わず多く存在する。そんななか、今回なぜ心電図の書籍を発行することになったのか。

結論から述べると、多くの心電図の書物は臨床の思考プロセスに沿っていないからである。画像でもいえることだが、心電図の意義はその患者さんの主訴によって大きく影響される。例えば、ST上昇が疑われる心電図において、健康で若い無症状の患者さんなのか、喫煙歴・糖尿病ありの胸痛で受診した高齢者なのかによって大きく心電図の受け取り方は異なる。高K血症の心電図はこうだ！と述べても、どういった場合に心電図をとらないといけないかという思考プロセスが多くの書物で省かれている。本書では、「主訴」→「どういった心電図変化を予測するか？」→「心電図の読み方」という思考プロセスを紐解くことに力を入れた。

本書に出てくる心電図はEM Alliance (EMA) のウェブサイトに掲載されてきた心電図を読みやすく編集したものである(EMAについては、本書30頁のコラムで紹介している)。症例によってはウェブ上で実施したアンケートの興味深い結果なども載せている。

本書は救急医のみならず、心電図をとることが予想される病棟や外来でも大いに役立つものだと自負している。また、症例によって心電図の読み方のコツや治療のまとめなども含まれており、多くの豆知識も散りばめられている。

EMA初期の頃にウェブで心電図を多く提示してくださった東京ベイ・浦安市川医療センター救急科の志賀隆先生、マサチューセッツ総合病院救急部の長谷川耕平先生にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

アメリカの救急医で心電図の大家として知られているDr Amal Mattuの格言を最後に紹介したい。“ECGs are basic tests. But your ability to read ECGs shouldn't necessarily be basic as well.”(心電図は初歩的な検査であるが、心電図を読む力は決して初歩的であってはいけない)

それでは皆さん、主訴から心電図を攻めていきましょう！

2015年9月

渡瀬剛人